

2020年4月26日 礼拝説教要旨  
 詩編講解説教12「希望はキリストに」  
 詩編12：2～9、ローマ8：35～39

冒頭「主よ、お救いください」という言葉で始まるこの第12編は明らかに嘆きの詩です。この詩人は完全に絶望しています。腐敗し、不正のはびこる世の中の現実を見て愕然としている様子が伺えます。最後の9節「主に逆らう者は勝手にふるまいます。人の子らの中に卑しむべきことがもてはやされるこのとき」原文に則して訳しますと「周囲を邪悪な者たちがうろつき、卑劣なことが人の子らの中でもてはやされている」となります。そういう現実がある。聖書の時代だけでなく、現在も同じようなことが言えるでしょう。

詩人はどういう状況を見てそう言っているのでしょうか。「人は友に向かって偽りを言い、滑らかな唇、二心をもって話します。主よ、すべて滅ぼしてください。滑らかな唇と威張って語る舌を」（3～4節）ここで言われていることは言葉の問題です。言葉の虚しさと申し上げてもよいでしょう。3節「偽り」とあります。これはシャウ、十戒の第3戒「主の名をみだりに唱えてはならない」の「みだり」と訳している言葉です。実体のない、うわべだけの言葉。そういう言葉が世の中に溢れていることを詩人は嘆いています。また具体的に「なめらかな唇」（3節）あるいは「二心」（3節）とも表現しています。唇がなめらかであるというのは、口がうまい、あるいは「饒舌」ということでしょうか。「二心」というのは心にもないことを言って相手にへつらうことです。また「威張って語る舌」（4節）とあります。これも直訳すると「大きなことを語る舌」です。つまり大言壮語することです。そういう虚しい言葉が飛び交っている。それだけわたしたちの言葉には問題があるのです。

どうしてそうなるのか。それは神さまとの関係がそうだからです。信仰と生活とは表裏一体です。神さまに対する姿勢がわたしたちの日々の生活に反映されます。興味深いのは、この詩人はこういった言葉の乱れが信仰とは別の世界の話ではなく、それがまさに信仰者の中枢にも入り込んでいることを明らかにしています。「主よ、お救いください。主の慈しみに生きる人は絶え、人の子らの中から信仰のある人は消え去りました」（2節）「主の慈しみに生きる人」も「信仰のある人」も共に信仰者のことを指しています。そういう人たちが消え去ったと言うのです。これは衝撃的な言葉です。信仰を持てば大丈夫、そういうことはもはや言えないということです。さらに5節に注目してください。「舌によって力を振るおう。自分の唇は自分のためだ。わたしたちに主人などはない」ここは原文に則して訳しますとこうなります。「彼らは言う。我らの舌は強い。この唇が共にあれば誰が我らの主であろうか」これは元来信仰告白の言葉であり「主は我らとともに」と言うべきことを「この唇は我らとともに」と言っているのです。自分の口、自分の言葉を主と信じているというはなはだ傲慢な人間の姿がそこにあります。神さまを主とするのではなく、自分を主とする。そのように信仰が歪められ、神さまが軽んじられていく。信仰の共同体ですら、そのように内部から崩壊し、信仰ある人はいなくなってしまう。そこにこの詩人の本当の絶望があるように思います。

それはそれだけすべての人間が根源的に神さまから離れ、己を神として歩んでいる、アダムから始まった人間の罪がいかにか根深いかということが示されているのではないのでしょうか。自分は大丈夫だと過信してはいけません。信仰があるからと言って油断できない。その隙をサタンは狙っているのです。そして神さまとの関係を分断させ、神さまから離れさせようとする。新型ウ

イルスは人と人との距離を遠ざけています。人はますます孤立し関係が分断されています。それは罪の状態に酷似しています。この病いが人間の本当の姿を露にしている。ですから信仰者も己を過信せず今こそ御言葉に耳を傾けなければなりません。

ではどうしたらいいのか。信仰者ですら神さまを見失うのなら、もはや成す術はないのでしょうか。けれどもここに希望が語られます。7節の「主の仰せは清い」は「主の言葉は純粋な言葉」となります。人間の言葉は二心ある言葉でしょう。けれども神さまの言葉は混じりけのない純粋な真実の言葉なのです。そしてその神さまの言葉はイエス・キリストという形になって現れました。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」（ヨハネ1：14）と記されているとおりです。偽りの言葉が飛び交うこの世界に真実の言葉が宿りました。それは破綻していた神さまとわたしたちの関係を結びつけ、そしてわたしたちの関係を結びつけるためです。そしてわたしたちが真実の言葉をもってお互いの関係をもう一度たぐり寄せ、愛をもって仕えるためです。そのためにキリストは何をされたのでしょうか。

7節に「土の炉で七たび練り清めた銀」とあります。これも原文を見るとわかりますが、「地のるつぼの中で精錬され、七たび練り清められた銀」となります。「地」とはアーレツ、わたしたちが生きているこの「地上」を意味する言葉です。るつぼは金属を溶かす炉のこと。地面に炉が掘られている。そこに神さまの言葉が入る。「七たび」これは完全数の7です。そこで完全に清められる。神さまの言葉はこの絶望の世界に入り、その土の中にまで入って精錬されるのです。キリストも十字架で死なれ土の中に葬られました。これはイエス・キリストの十字架の贖いの御業を表しています。もちろんキリストは清められる必要のないお方です。けれどもわたしたちのために罪を負ってくださった。そして神さま御自身が十字架の試練をお受けになられたのです。完全に清めてくださった。それは罪を清めてくださったということです。

わたしたちの罪を担いあの十字架で七たび清められた、真実な言葉であるイエス・キリストをわたしたちは持つのです。このキリストこそわたしたちの希望です。このキリストという真実な神さまの御言葉によって神さまとの関係が回復され、人との関係も回復されていく。今日はローマの信徒への手紙を読みました。「どんな被造物もわたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできない」（ローマ8：39）この罪の蔓延する世界で、どんなに神さまから離れた状態に陥っても、わたしたちはキリストによって神さまに引き戻されます。神さまから決して離されないのです。「主よ、あなたは仰せを守り、この代からとこしえに到るまで、わたしたちを見守ってくださいます」（8節）この御言葉はキリストの十字架とよみがえりの永遠の命によって真実なものとなりました。